
科学の天才が魔物のすむ世界に転生する話

魔物

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学の天才が魔物のすむ世界に転生する話

【Nコード】

N5522Y

【作者名】

魔物

【あらすじ】

天才科学者が、異世界に転生する話。
ほぼ無双だけど、魔物のほつも強い設定。
ほぼ一日更新。シリアスな雰囲気かも。

科学の国でブローグ（前書き）

中二病は気にしないでください。

科学の国でプロローグ

俺は自分の研究所を見ながら子供のころを思い出していた。この研究所とももう最後か……。

俺はこの世界で「創造の天神」と呼ばれていた。

最初の発明はスモールライトだ。物質の原理を知りたくて自宅の研究所で調べていたら物質を小さくする事を可能にする魔法のような原子を発見した。そこからは特許を取り更に空間転移の物質をついでに発見し、空間移動の法則もついでに調べ上げた。ここで俺の資産は一年で3兆を越した。

ここからは俺は様々な発見で33世紀の日本を発展させていった。時には「未来日記」や「時空遊泳車」^{タイムマシン}、「靈魂呼び出し時計」「疑似人間」「永久水道」など自分がほしいものや役立ちそうなものを作っていた。

そして今俺は研究所のエレベーターを降りた。エレベーターは中が透明な強度のあるガラスできており、中の様子がよく分かる。俺が研究対象を増やしていくことに増える階層は今地上60階階地下80階となっている。

人生の大半は遊んですごそうと子供の頃に意気込んでいたが、ほとんどを研究に過ごしたおかげで遊ぶための友人は今擬人人間^{アンドロイド}と研究所のおっさんたちしかない。何がらくておっさんと遊ばなきゃいけない。

だが俺は今、異世界に旅立つ。子供の頃見つけた異世界への転生を行う。28歳まで生きてきたのは親が死ぬまで待っていたからだ。俺の親は研究者だ。

子供の頃から研究ができたのも親のおかげだろう。親は二人とも天才だったため、俺はいつも研究所の隅に置かれて親たちの研究を

見させられていた。そのため俺は幼稚園にはあまり通わされていない。

だけど幼稚園の頃一人だけ俺を気にかけてくれる人がいた。その人は俺が「天国」を作る前に死んでしまった。天国は肉体が停止したとき魂を収集しそこでまたこの世界に記憶をリセットして転生させる機械だ。天国はそのほかに1日だけ話し合えるようにできているがあの人とはもうはなせない。

タイムマシンは自分の記憶をさかのぼる機会でそのときの記憶を立体映像にする機械で会えるが話すことはできないというものだ。そのため過去は変えることもできない。

エレベーターが屋上につき電子音が鳴った。ドアを開ければ宇宙が広がっている。ここは星を見るためにくる観光客などもいるが今日はあけていない。

屋上には無数の電子球体が飛んでいる。歩いて屋上の中心に行くのと丸い緑色の光線が床に書かれているその周りにはチョークでかかれた様に字列が続いている。これは電子記号といい一つ一つが意味を成すものだ。

俺は真ん中に立ち電子球体に命令する。

「OKだ。俺の体を異世界に飛ばしてくれ」

電子球体は異世界にアクセスし情報を書き換えていく。書き換えには俺の情報が追加される。そしてこの世界の俺の情報も書き換えが始まる。

腕が消失して足が消えてそして、俺の顔まで改変が進んでいく。

「ふふこれで最後だ。もう行くよ」

「私たちは主様の戻るその日まで永遠にお待ちしております」

電子球体の中から声が聞こえてきた。俺の作った最後のAIだろう。彼女には俺のこれからするであろう発明と今後起こるすべてのことの対処を任せてある。最後まで俺が会話するのはAIか。

閃光は収まり、残るのは彼の残した星と彼の名前だけだ。
星の名は「ディザイニア」一人の天才が消えた星だ。

科学の国でブローグ（後書き）

作者は初心者。

中二病は気にしないでください。

（大事なことなので二回言いました）

異世界転生

書き換えが終わり、俺の魂が異世界に移動ドラッグされた。

まだ、目も見えず暗闇の中だ。そこからは意識が飛び、次に起きたときは生まれたときだった。

まだ、何も話せないため赤ちゃんの状態で適当に泣いておいた。

そこから一年たって、現状を把握していった。

まず、目が見えるようになってからは家の中をうろついた。家の中を見ればその世界の現状がなんとなく分かるのだ。

見たところ、魔法が原動力になっていうようだ。

家のつくりは基本レンガでどうやら寒い地域のようだ。書き換えた情報は基本ランダムでどこに生まれるかは分からない。決めたのは記憶の引き継ぎだけだ。

魔法が原動力という理由は、宙に浮かぶヤカンなどを見ればすぐに分かった。その他には勝手に温まる毛布やテレポートっぽい魔法が使われていたからだ。魔法だという理由は宙に浮かぶときに科学の場合はある程度の方向性が決まっている。そのため自由にリモコンを使わずに操作しているから魔法だと決めることができた。

俺はそれからは魔法は使えるんだろうかとか思いながら過ごした。

三年後、俺は四歳となった。名前はフルレイド・アルクラインだ。普通の民家の次男だ。

このごろ俺は奴隷に売られるということが分かった。普通の民家では長男を育てるだけでぎりぎりのようだ。じゃあ何で生んだんだと思ったが時代が悪かったのかと思って諦めた。

どうやら六歳で奴隷になるようだ。まあ奴隷になったら奴隷商人を殺して何人か奴隷を助けてギルドに登録にでも行けばいいかと思っ

た。
家族からは奴隷にするために生んだ息子なので俺はあんまり愛情をもらってない。

俺は自分が転生者でよかったと心の底から感じた。

2歳の頃から俺はこの世界の魔法を科学と結び付けて考えていた。魔力はおおよそ使い勝手のいい原子と思えばいい。魔力は視認することができ科学よりよほど扱いやすかった。

魔力はたいいていの人間にあるもので全生物のほとんどが持っている。持っている量としては個人で違い生物でも持っている量が違う。人間は大体全人類のトップだと考えればいい。道立でエルフがいる。魔物は人類に分類されない。人類には集団で行動する知的生物のことを指す。

俺は奴隷になってからのために魔法の練習をしていた。魔法は詠唱により発動する魔法と陣を魔力で形作ることによって発動する2種類だ。「ファイア」

目の前の裏庭の地面に魔方阵を描きそこから炎が溢れ出す。だいたいい今で魔力の半分ほどを使う。俺はまだ初級程度の魔法しか使えない。

魔力の上げ方は魔物を殺しその魔物から経験地を取得しレベルを上げる方法と魔道具という魔法を使うための道具を使い魔力を上げることができる。

今俺は魔道具を約30個ほど所持している。

魔道具は鉄などや高純度の魔石などを使って作るが俺は前から作っていた科学の物質や道具を使って代用した。

俺の今のレベルは15だ。最高は勇者クラインのレベル9999だ。勇者は魔王を倒したとして有名だ。魔王と勇者は1京人に一人に生まれる、そのほかにも雷帝や暴王や悪宣兎など様々いる。100レ

ベルごとに一つ異能がふえるらしい。

ギルドに登録するとそういう素質が分かるギルドカードをもらえる。

今日も俺は魔物を倒しに行く。魔物は森や高原などどこにでも存在している。

俺は両親にいないものとして扱われているためどこに行っても基本的に構わない。だが、森や他の村には行くなといわれている。

もちろん死なれると困るからだ。だから俺がどこに行こうとも知らん振りをしている。

森に行ったことがばれると殴られる。俺は仕方ないことと扱っているから平気だが長男がかなりうざかった。

長男は俺にやたらと突っかかってくる黒髪の不細工豚野郎でほんとにきもい。

俺の容姿は豚顔兄と違いかなりかつこいい肩までの黒髪の少し切れ長の目と整った口と鼻でできている。服は黒いセーターのような服と黄土色の長ズボンだ。今は季節は秋くらいで寒い。

そして俺が山のほうに行こうとしていると豚顔兄が後ろからニヤニヤした口調で言った。

「フルレイド、山に行くのか？まさか母さんの言いつけを破る気だな？げへへ」

俺は一瞬だけ蔑みの目をむけてから平坦な口調で言った。

「違う。見ていただけだ」

「ふんお前俺に口答えするのか？あと敬語使えよバカ！！」

「別にしていません、今戻ります」

「なまいきな愚弟だな」

豚顔兄が家の中に入ったら命令を無視して森に向かう。どうせあいつのことだから行ってもいないのに森に入ったことにするのだろう。森を散策していると魔石を探索系の魔法で発見した。

魔道具の一つである指輪を手にはめ物質操作を使い魔石を地面から取り出す。魔石は石油のようなものだ。

指輪の能力は物質の操作の補助だ。指輪は赤い魔石が銀の輪につけられている。

それから、魔物と何回か遭遇しすべて倒しきり家に戻った。

この作業をこれからほぼ毎日続けていった。

2年後レベルが44になった。魔道具は100を突破した。魔道具は異空間収納機をつる覚えで造りそこに収納した。

魔道具は前世で使っていた科学の応用が多く技術だけなら俺はこの世界でトップに位置するほどになった。

異世界転生（後書き）

説明が多い？知りません

奴隷から成り上がり

奴隷商人と母の間で取引が終わった。

俺は商人に「こっちに來い」と言われその後ろをついていく。馬車に乗せられ都市に移動していく。都市の名はセルリアだ。魔法のかなり発展した国でダンジョンという魔物すんでいる洞窟などが近くにあり発展や滅亡を繰り返した都市だ。そして俺の第一目標は三賢者に入ることだ。三賢者はこの世界で最も強い魔法使いのことだ。そのためにもここから逃げるために奴隷商人を殺すべき瞬間をうまく見つけなければならぬ。商人は奴隷館に俺を入れた。奴隷館は絶望した雰囲気が漂っていた。しかし内装は至ってきれいにしてあり奴隷が売られているとは思えない場所だった。

奴隷商人は俺に馬車に乗る前に奴隷輪という首輪をつけていた。この首輪は使用者の命令を無視した場合鋭い痛みが入るというものだ。抵抗すればするほど痛みが増し死に至るというものだが、俺からすればこの程度の魔道具ならたやすく分解できるため馬車に乗る頃には痛みがないように変更した。

奴隷商人は俺を一つの檻に閉じ込めた。奴隷商人が立ち去ったのを見送ってから俺は周囲の状況を把握した。

周囲には俺と同じような奴隷が子供から大人まで多種の種族で並べられていた。

「へっお前もかわいそうなやつだ。まだこんな年なのに奴隷にされるとは」

声をしたほうを振り向くと片目に傷が入った中年のおっさんがいた。おっさんの体格はかなりよく全身の筋肉が凄まじい。

「おっさんはなぜこんな場所にいるんだ」

「口の悪い餓鬼だな。俺は仲間に裏切られたのさ。一緒に討伐していたBランクのホーンウルフの討伐中に倒したと思ったら俺は仲間
に気絶させられてここに売られていたわけだ。情けねえ」

「そうか、なら助けてやろう」

「はっお前みたいな餓鬼に何ができる」

俺は口の中に隠していた一つの黒い指輪を取り出す。
指輪を手にはめる。

「なんだそれは？」

「異空間収納機」

俺は指輪を嵌めた手で宙に手をかざす。俺が何かを掴む仕草をする
と一本の黒い刀が現れる。

「まさか魔道具か！！？だが、器物を破損すると奴隷輪が発動する
ぞ」

おっさんは心底驚いた顔をしてから困った顔で言う。

「首輪の効果ならもうここにいる全ての奴隷のを解除した」

おっさんの反応を少し楽しんでから俺は牢の檻を刀で壊す。次に隣
の檻をまた破る。おっさんが出てきた。「まさかそんなことが！？」
とつぶやいていた。

商人が騒ぎに気づき戻ってきた。俺はすかさず商人を切り裂く。
赤い鮮血は飛び散らず黒い刀に商人は吸い込まれた。

「その魔道具は？」

おっさんが聞く。

「刀の名は妖刀・夜鬼丸。切った対象を闇に取り込みその魔力を吸収する能力だ」

俺は試しに置いてあった花瓶を切る。花瓶は闇に包み込まれ消えた。その後は奴隷商人や従業員を消し去り残ったのは俺たち奴隷だけとなった。

俺は全ての奴隷を解放し宣言した。

「お前たちは帰る場所はないだろう？帰る場所がないなら俺のもとで働け！この世界は腐っている。

俺が変えてやるこの世界を！お前たちは俺について来い」

奴隷たちは数人が帰ったものの他のすべての奴隷は俺の元で働くこととなった。

奴隷の人数は約80人。元奴隷たちはみな六歳児の下で働くこととなった。家があるものは俺にお礼を言っただけだった。

現在レベル50。彼の力リスマはこの世界でも大きな力となった。

十日後、

俺たち元奴隷軍団は「王の光」と名乗ることになった。

王の光は奴隷商館をかなり改造し暗い雰囲気を作るくし、地下の1階までだったのを4階までにした。

そのほかに規則や、危険区域などをまとめて基地の一階に大きく文字を彫って書いてもらった。文字や言語はもちろん前の世界とかな

り違った。

女の子やあまり働けなそうな人は掃除選択などをさせた。基地の改造は俺と男何人かでした。

俺の部屋は地下4階にある。地下はエレベーターや4人部屋などが基本で俺は一人部屋だ。他に監視カメラなどを俺はつけておいた。AIも1機だけつくって俺の部屋に置いた。AIは加工などをするのが大変だったものの何とか作った。

パソコンもAIに合わせて一台作った。

無線も全員に配った。電波が存在しないが魔力は空中に常に彷徨っていた事を発見したためそれを電波代わりになるようにしている。一回配ると奴隷さんたちははしゃいでいた。正直大の大人が無線で会話してはしゃいでいる光景は目に毒だ。

今日からは商売をすることになっている。食べ物をまず安定して食べられるようにするため大規模農業をするための機械を無料で提供したり格安で売る。

その後食べ物の自給率が増えたら値段を少しずつ上げこちらの利益もすこしずつ増やしていくというわけだ。

その後、

パソコンを売り捌き庶民の情報の伝達力を上げる。

この世界のパソコンは電気代がかからず情報を伝達できるため売りやすいのである。

商売のほうは基本人にさせAIには機会をいろいろと作ってもらうことにした。

商売はこれで終わりだ。後は適当に発明していけば生活水準も高まるだろう。

広告を何十枚かだし各家に配るとこのうわさは広がり、土地を持っているものは次々に買い出した。

その何年後にパソコンを売ると現代社会と同じように飛ぶように売れ年収3兆マネーの利益をたたき出した。1マネーは一円と同じだ。

その頃には王の光の名前は全国を駆け回りさらに年収が上がった、という話だ。

奴隸から成り上がり（後書き）

商売の話が無駄に長くなった。
次はギルドの話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5522y/>

科学の天才が魔物のすむ世界に転生する話

2011年11月18日04時32分発行